発表要旨

喜界島におけるジオパーク学習の取組み

鈴木倫太郎[1・2]
[1]喜界島ジオパーク推進協議会・[2]喜界島サンゴ礁科学研究所

代表発表者の連絡先：dan9taro@kikaijima-geo.com
発表カテゴリー：教育

喜界島ジオパーク(構想)

はじめに

喜界島は奄美大島の東約 20km に位置し、周囲 48.6 ㎞、人口約 6,500 人、一島一町の離島である。島は世界でも屈指の隆起速度を誇り、隆起サンゴ礁段丘が発達する地質学的にも貴重な島と位置付けられている。喜界町は、世界的にも稀な島の成立ちや文化を資源とし、町の課題解決や目標の達成の手段としてジオパークの仕組みを活用するため、日本ジオパークの認定に向けた準備を推進している。現在、喜界島ジオパーク(構想)では、ジオパークの理念に従い、島内において本格的なジオパーク学習の取組み 2023 年度より開始した。喜界島におけるジオパーク学習は、喜界町立の小学校 2 校と中学校 1 校、また喜界高校における離島留学生、一般向けの公民館講座と、全世代を対象とした学習活動を展開している。本発表では、喜界島におけるジオパーク学習の取組について紹介するとともに、課題と今後の展望について検討する。

小学校におけるジオパーク学習

喜界町立の喜界小と早町小の 2 校において、2023 年 9 月から小学校 3 年生から 6 年生までの各学年において、1 年に 1 回から 2 回のジオパーク学習を実施している。学習の到達点目標は、ジオパーク、喜界島の成立ちと大地の恩恵の理解とし、学習内容は各学年の学習指導要領に沿って理科と社会の教科教育を補完する内容に設定いている。2024 年度からは、早町小学校においてスクールバスを利用した校外学習を取り入れ、隆起サンゴ礁段丘の見学を実施した。

中学校におけるジオパーク学習

喜界中学校では、2023 年度から全学年でジオパーク学習を開始した。また 2024 年度から喜界中学校では探究学習を導入し、生徒一人一人が探究するテーマを決め深める学習に取り組んでいる。この探究学習を進めるにあたり、ジオパーク学習において島の成立ち、島独自のサンゴ礁文化、島の農畜産業などを学び、各生徒が探究テーマを決めるための学習として、ジオパーク学習を導入する試みを開始した。

ジオパクパク給食

喜界町立の全小中学校 3 校の全児童生徒を対象とし、喜界島産の食材を使用したメニューや郷土料理が提供される給食を「ジオパクパク給食」と名付け、食を通じたジオパーク学習を 2023 年度から実施している。この取組では、使用される島産の食材を通じ、隆起サンゴ礁段丘特有のアルカリ土壌や島の成立ちについての理解や島に適した品種や島の在来種の理解、また島の自然で醸成された食文化を学ぶ機会としている。ジオパクパク給食時には、食材や料理を解説するフライヤーを配布している。2024 年 2 月には、特別編として喜界島で生まれ島外で肥育された黒毛和牛を、給食で提供する企画を実施した。

小中学校教員向け研修

喜界町の小中学校では、以前より総合の時間における郷土教育に注力してきた。喜界島の小中学校の教員は、島外の鹿児島県内から赴任し、おおよそ 3 年から 4 年の期間、喜界島で任務を終えると他の任地へ赴く。そのため、新たに喜界島に赴任した教員は、当初喜界島についての知識が乏しいが、郷土教育に取組むこともあり赴任期間で多くの喜界島の知識を積極的に学ぶ。しかし、異動によって教員が得た知識の児童生徒への教えが継続しない点が課題として挙

げられてきた。この点を解消すべく、2023 年度から学校側の要望を受けて教員向けのジオパーク学習を開始した。2024 年度からは、社会科部会の教員を中心とした、喜界島の成立ちや自然・文化を学び、ジオサイトを巡る講座を実施する。

喜界高校における離島留学生のジオパーク活動への参加

鹿児島県立喜界高校では 2023 年度より島外からの離島留学「サンゴ留学生」を受け入れている。現在は、2 年生、1 年生各 6 名、合計 12 名の生徒が寮で生活をしながら喜界高校へ通学している。留学生は、喜界高校に通いながら喜界島サンゴ礁科学研究所において、研究者の指導を受けながら各自が喜界島の海や生き物、海と人との繋がりなどの研究テーマを設定し、喜界島ジオパーク(構想)範囲内での研究活動に取り組んでいる。本大会においても、3 名の留学生がそれぞれの研究成果を発表する。留学生達は、今年開催した「目指せ！日本ジオパーク認定！東経 130 度マラソン」において、コース上の給水ポイントで喜界島のまつわるクイズを考えたり、喜界島のサンゴ礁文化の象徴である「サンゴの石垣」の修復体験に参加したり、ジオパーク活動に積極的に参加している。

公民館講座

喜界島の中央公民館では、文化芸能など島民向けの様々な学習講座を開講している。その中で、喜界島ジオパークへの理解と認知向上を目的として、全世代を対象としたジオパーク学習、「喜界島のジオを知る体験教室」を 2023 年度より開講している。参加者の年代は、30 代から 80 代まで、平均年齢は 60 歳代。講座では、喜界島の成立ちや自然、歴史、サンゴ礁文化について実体験を伴って学ぶ。これまでに、「サンゴの生態をスノーケルで泳いで学ぶ」「日本一の生産量を誇るゴマの収穫を体験して喜界島の土と農業を学ぶ」「サンゴの石垣の修復体験を通じて喜界島のサンゴ礁文化を学ぶ」などの講座を実施した。

課題と今後

喜界町の小中学校では、これまでに総合の時間などで喜界島に関する学習を実施してきた経緯があるが、年ごとに取組む内容が変わったり学習の積み重ねが希薄になったりしまうこと、長い年月における一貫性が無いことや教員が島外から期限付きで赴任するため取組の継承が途絶えてしまうことが課題として挙げられた。この課題について、小中学校は、ジオパーク学習を通じて学年ごとに継続したテーマで学習を提供する点から、今後は継続的な郷土学習としての役割を果たすことが可能となり得る。また、今後は小学校においては総合の学習との連携、中学校では探究学習とジオパーク学習との連携を強化し、郷土教育におけるジオパーク学習の位置づけを明確化し、発展的に継続性成る学習システムの構築を図る。一方で、これまで喜界島で育った 40 代以上の年齢層は、学校での郷土教育等の取組が無かったことから、自分が暮らす喜界島が地質学的に希少な島であることや、自分の住む島が隆起サンゴ礁段丘であることを知らない島民が多い。島民が喜界島の価値を認識することは、ジオパークの取組を推進する上で基礎的かつ必要不可欠なことである。今後は、一般世代に向けたジオパーク活動の理解を進めるためのジオパーク学習の拡大を積極的に図っていきたい。

喜界島には喜界島サンゴ礁科学研究所があり、専門知識を有した研究者が所属しており、小学校から一般向けのジオパーク学習について、コーディネートから指導までを手掛けている。島に専門機関があることは、ジオパーク学習において大きな利点と捉えられるが、竹ノ内(2016)が「学校の統廃合や集落の消滅が現実となっているジオパークにとって，ジオパーク教育の目的は人材育成の一言につきる」と指摘するように、人口減少が進む喜界島の課題解決と持続可能な発展に資するためには、研究所の専門家以外にも島内におけるジオガイドや、ジオパークの取組に参画する人材の育成が必要である。この人材の育成についても、今後積極的に検討を推進したい。

引用文献：竹ノ内 耕(2016)ジオパークの視点を導入した学校教育と社会教育の進展－糸魚川ユネスコ世界ジオパークを例に－. 地学雑誌, 125(6), 795-812.